

感染症検査担当

調査研究名	研究の概要
<p>新型インフルエンザウイルスに対するHI抗体価調査について</p> <p>研究担当者：扇谷陽子</p> <p>研究期間：平成21～22年度</p>	<p>【目的】 新型インフルエンザ[インフルエンザ(H1N1) 2009]患者のHI抗体価についての疫学情報を得ることを目的として、患者血清を用いてHI抗体価調査を実施した。併せて、札幌市における成人の感染状況を把握するための疫学情報を得ることを目的として、流行前と流行期に採血された20・30歳代妊婦乾燥ろ紙血液を用いてHI抗体価調査を実施した。</p> <p>【方法】 患者試料は、札幌市内の10医療施設を受診し、PCRまたは迅速検査A陽性であった患者のうち、インフォームド・コンセントを得られた97名の血清とした。このうち26名については、来院または入院時、および発症から1週間以上経過後に採血されたペア血清を用いた。残り71名については、発症から1週間以上経過後に採血された血清を用いた。 妊婦試料は、当所で行っている妊婦甲状腺機能検査を2009年4月～2010年1月までに受検した妊婦のうち、検査申込書において検査終了後の検体を他の研究等へ利用することを了承した者、期間内の各月20歳代と30歳代各50名、合計1,000名の乾燥ろ紙血液を用いた。 測定は、季節性インフルエンザウイルスに対するHI抗体価測定方法に準じ、4単位の不活化ウイルス(A/California/07/2009pdm X-179A)と0.5%七面鳥赤血球を用いて実施した。</p> <p>【結果と考察】 患者について、免疫を獲得していると考えられる発症後22日以上経過後の採血が可能であった81名中78名(96%)のHI抗体価が40倍※1以上であった。ペア血清の検査が可能であった26名中19名の2回目のHI抗体価が、初回の4倍※2(2管)以上に上昇していた。上昇しなかった患者のうち6名は、2回目の採血が発症後7～14日と、2回目採血までの期間が短かった。 妊婦について、20歳代・30歳代とも、流行前(4・5月)に40倍※1以上の抗体を保有していた者が存在した(4月:20歳代4%、30歳代8%/5月:20歳代4%、30歳代4%)。両年齢群の月毎の40倍以上の抗体価の保有率が、流行前の4・5月それぞれと比較して有意に上昇(P<0.05)した月は、2010年1月のみであった。1月採血者の保有する抗体は、感染症発生動向調査の結果と採血時期が妊娠早期であることから、感染由来によるものが大きいと考えられた。</p> <p style="text-align: right;">※1: 有効防御免疫の指標とされている抗体価 ※2 抗体価が有意に上昇したと考えられる倍数</p>